The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	明治以降創建の神宮における空間デザインについて：橿原神宮および明治神宮の空間構成における構成意図の考察
Author(s)	浦﨑, 真一
Citation	デザイン理論. 2008, 53, p. 100-101
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53510
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

明治以降創建の神宮における空間デザインについて
── 橿原神宮および明治神宮の空間構成における構成意図の考察 ──

浦﨑真一／大阪芸術大学大学院

１．はじめに

近代日本において多数の神宮が創祀された。明治以降創建の神宮において，古来の神社と明らかに違う点としてあげられるのは創建に関する資料が残されていることである。その資料には鎮座地選びや境内構成の意図といった具体的な設計までが含まれている。本考察はそういった文献から当時の神社に対する考えを抽出し，当時の設計者と時代背景が神宮に対してもっていた感覚を明らかにする。

本考察の対象は，橿原神宮および明治神宮である。両神宮は大規模な国家的事業として創建され，詳細な文献も残されている。また，両神宮の創建メンバーには重複もみられ，相互の影響や類似があり，当時の神宮観を考えるにあたっては有意義な対象であると考える。

２．創祀の背景

明治４（1871）年の太政官布告234には「神社の儀は国家の創祀」とあり，それまで社家の世襲だった神社は伊勢神宮を頂点としてすべて国家によって祭祀されることとなった。これを受けて天皇を頂点としたヒエラルキーを浸透させ，天皇権力を昂揚させるしかけとして大規模な神宮の創祀が国家によって執り行われてきた。

明治以降の神社創祀に大きな影響を与えたものに明治22（1889）年の「神社建築制限図」がある。これは神社の造営・修理を絵図面によって制定しようとするものであった。しかし全国的にこの制限図にそって神社造営がなされたわけではなく，規模や様式に対する標準形式として認識されていたようである。またこの制限図においては玉垣内の空間計画について書かれているのみで，その外側の神域については記載がない。このためそこには制限図に全く関係なく構成された，自由な日本的造形の感覚がにじみ出ているのではないかと考えられる。

３．橿原神宮と明治神宮

橿原神宮は橿原市久米町に鎮座する旧官幣大社で，主祭神は神武天皇である。京都御所より温明殿と神嘉殿を下賜され本殿，拝殿として明治23（1890）年に創建された。その後大正15（1926）年と昭和15（1940）年の２回の整備拡張事業により現在の姿となった。

本殿，拝殿，鳥居が一直線に並び，参道が正面から設けられた明治期の橿原神宮は，大正期には参道の形状に現在の矩折という大きく異なる点が現れている。これについて昭和期の造営記録に見解が記載されている。要約すると本殿正面から一直線に進む参道が計画に上がるも，それでは荘重さはあるが，社頭から社殿が見え単調で森厳さを欠く。それに比べ現参道は転一転変化があり，神前に近づく幽玄森厳な気分を深くするのでこちらに決定したという。これは日本庭園や都市計画の手法として知られた折れ曲がりや見えがくれの手法の応用と考えられ，古くからの日本的空間構成をうまく取り入れたものである。しかしこの構成は古社にも見られるもので，構成感覚の原点とのつながりを神社によって導き出す手がかりとなると考えられる。

明治神宮は東京都渋谷区に鎮座し，明治天皇を主祭神とする旧官幣大社である。明治天

皇が崩御し，大正４（1915）年に明治神宮造営局を設置して造営に取りかかり，大正９（1920）年，鎮座に至った。

立地は明治天皇ゆかりの元南豊島御料地が選ばれた。南参道から一度直角に折れて西進し，もう一度折れて北進する正参道は直線で幅員も広く壮大さを出しており，また折れることによって圧倒的な存在を示さず，視界の転換によって神聖さを高めている。一方正参道に至るまでの南参道や北参道，西参道は緩やかな曲線を描き，正参道の荘厳さに比べて優しさや親しみやすさを感じるものである。明治神宮には，地形を利用しながらも不足の部分は造成によって補い，また形状もきっちりと整えて荘厳さを出すところをつくる一方で，地形に合わせたやわらかい構成もつくるというように，２つの性格をうまく組み合わせた空間構成である。

４．両神宮の比較

明治維新後に創祀された橿原神宮，明治神宮は，その創祀の過程が記録として残っておりある程度比較することができる。

それぞれの立地のどちらにも共通していることは，特に目立った地形的特徴がある地ではなく，祭神にゆかりの地が選ばれているということである。境内はどちらの神宮も大きな規模を誇るが，その構成はほぼシンメトリーであり，「神社建築制限図」の影響が考えられる。このような境内構成よりも特徴を顕著に表すのが参道の形状である。明治神宮は曲線を描き，両神宮共に矩折を呈している。一直線に本殿まで到達できないが，そこに日本的な造形感覚を見出すことができるのではないだろうか。明治以降に神宮が創建されるにあたり，一直線に進むことで得る荘厳さや威圧力に加え，古社が地形に合わせて構成した曲折によって得られる優美さや親近感を求める感覚も息づいていたのではないかと考えるのである。もう一つの特徴が森である。両神宮を囲む森は，どちらも人工林である。当時の設計者は，神宮において森がいかに重要かを念頭に置いたことが記述によりわかる。元々神聖さを感じる地形にない神宮で，この時につくられた森がどれほど重要であったかは，現在のその姿と神宮の空間から受ける感覚によって知らされるところである。

５．ま と め

鎮座地選びから新しく始められた明治以降の両神宮の創祀は，それぞれの特長を生かし計画がなされていることがわかった。しかしその根底にある精神はやはり神聖な空間をつくるということであり，当時の関係者の綿密な計画と苦労がうかがえる。その中で参道に柔らかな動きや視線の変化をつけており優美さや柔軟さ，親近感を持たせるものとなっていることは，日本的空間構成の流れを受け継いだものであるとともに，さらに遡った古社の空間構成とも共通するものである。これは日本の空間構成感覚と神社の空間構成の関係を考える上で重要な共通項である。

参考文献

内閣官報局『法令全書　第四巻』原書房，1974／千田智子『森と建築の空間史　南方熊楠と近代日本』東信堂，2002／吉野神宮『吉野神宮の建築と歴史』1998／橿原神宮庁『橿原神宮』1989／橿原神宮庁『橿原神宮史巻一』1981／橿原神宮庁『橿原神宮史　巻二』1981／橿原神宮庁『橿原神宮史　別巻』1982／内務省神社局『明治神宮造營誌』1930／田坂美德『官幣大社橿原神宮境域畝傍山東北陵陵域拡張整備事業に於ける　神宮参道及造苑施設に就きて　其二』／本郷高德『社寺の林苑』，雄山閣，1929